

京都大学若手人材海外派遣事業 ジョン万プログラム（職員派遣）
平成30年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研 修 者	職 名	掛員
	氏 名	田中 拓也
研 修 先 等	渡 航 先 国 名	タイ王国
	研 修 先 機 関 名	ASEAN 拠点
	研 修 期 間	平成30年8月1日～平成31年3月27日
具体的な研修内容	<p>ASEAN 拠点のジョン万職員として行うべき研修内容（業務）については、過去の報告書にすでに網羅的かつ具体的に記載されているため、ここではこれまでの業務からの変更点や、新たな取り組みを3点に絞り取り上げる。</p> <p>1. 拠点 NGO 法人化にかかる種々事務手続きの整備</p> <p>私が拠点に着任した頃は、在タイの本邦大学で初の試みとなる拠点の NGO 法人化移行手続きの真只中であり、これに伴う新たな事務手続きの速やかな構築整備を行うことが喫緊の責務であった。</p> <p>特に、契約や会計上の手続きが今までのものと大きく異なることとなり、これまで締結していた契約をすべて NGO 法人として締結し直し、タイの法人として、タイで定められたルールに則り会計報告等を行う必要が生じた。</p> <p>タイ側での情報収集と、収集した情報を日本側に正確に伝えることが私の役目であったため、現地職員と協力し、各種取引業者、銀行、コンサルタント会社および政府機関等への度重なる確認と調整を行い、判明した情報を整理し、日本側に報告した。</p> <p>拠点からの報告を受けて日本側で対応についての検討が行われるため、誤った情報を伝えてしまうことがないように、また、検討に必要な情報を提供するため、商慣習の違いや意思疎通が出来ているかについては常に細心の注意を払う必要があった。</p> <p>在タイの本邦大学で初の NGO 法人化ということで、タイ教育省・在タイ日本大使館をはじめ日泰政府関係者や本邦大学からの注目は非常に高く、それゆえ私たち拠点にいる者はよく「一番大変なことは何ですか」と尋ねられることが多くあったが、私はいつもこの答えに窮していた。なぜなら、これらはすべて一人ひとりの極めて地味で地道な作業の積み重ねであり、また、相手方の文化を受け入れる寛容さが求められるものだったからである。例えば、とるべき手続きについて銀行側に確認しようにも、本社に連</p>	

絡をすると支店によって対応が異なると言われ、支店を訪問するとその支店の中の担当者レベルで対応や回答が異なることが通例のようで、銀行員 A の指示通りに必要な書類を用意し、再度銀行に赴き銀行員 B に提出すると、提出すべき書類の種類が異なるためやり直す羽目になった、などというのはもはや日常茶飯事であった。炎天下の中、現地職員と一緒に、時に憤りながら、時に笑いながら、来る日も来る日も拠点と銀行の間を行き来したことも、今となってはいい思い出である。

2. 他大学の職員研修の一環としての「ジョン万プログラム」の紹介

私がタイで見聞した限りでは、大学の事務職員が研修という名目で自大学の拠点やオフィスで業務を担うということは珍しいようで、「ジョン万プログラム」のことを他大学の職員の方に紹介すると驚かれることが多かった。

ASEAN 拠点にほど近いオフィスビルに事務所を構える東海大学の駐在員の方もその中の一人で、タイで主宰される東海大学職員のための国際業務研修の一環として、「ジョン万プログラム」のことを是非紹介してもらいたいとお声がけをいただいたことが契機となり、「ジョン万プログラム」で研修中の職員が、研修で訪れた他大学の職員に対して「ジョン万プログラム」の説明を行うという不思議な構図が展開される運びとなった。

説明を行った職員 4 名との意見交換や交流を通じて、他大学の海外研修との違いや取り組みについて学ぶことが多くあった。例えば、「ジョン万プログラム」がなぜ他大学の職員にとって珍しいのかということ、一方的な指名によるのではなく、本学らしく職員の自主性を尊重した推薦によって参加者を募っていること、数か月から半年程度の連続した滞在で、研修としては中長期に渡ること、また、国際系業務経験者のみではなく、様々なキャリアを積んできた、しかも若手の職員が参加していることなどが特に新鮮に映ったようであった。

こうした経験から、留学フェア等各種イベントでの挨拶回りや立ち話、懇親会での何気ない会話や情報交換といったものが、上に述べたようなネットワークの更なる拡大と強化に発展寄与することが実感できた。

現在、現地連絡事務所などを含め、タイに拠点等を置く日本の高等教育関係機関は増加を続けており、その数はすでに 50 を超えている。そのため、在タイ大学の本邦職員同士で交流する機会は今後も必然的に増えてゆくだろうが、消極的な受け身の姿勢で参加するだけ参加する、というのではなく、常にネットワーク創出の機会を伺うアンテナを張り巡らせて、積極的に活用しようとする姿勢がますます求められることになるだろうと

感じた。

3. 本学への入学等を希望する留学生への支援

本学への留学に関して、拠点に寄せられる留学希望者本人または保護者からの問い合わせの窓口として、必要に応じて日本側に協力を仰ぎながら各種対応を行なった。

留学フェア等にも積極的に参加し、ブース対応やプレゼンテーションを通じて留学を希望する学生への情報提供および支援を行なった。そのために、まず本学の留学制度の概要を一から自ら学ぶことから始まり、留学フェアで個々の学生等のニーズに応じて適切な情報を提供するよう努めた。

一部のトップ校を除いてタイでは英語の習熟度が低いいため、留学フェアでのプレゼンテーションは随行する現地職員がタイ語で行ってきたが、ある時現地職員が他用務のため参加することができず、私が英語でプレゼンテーションを行うこととなった。5分という限られた時間であり、また、原稿を棒読みするだけでは熱意が伝わらない上に本学への興味関心を削いでしまうため、本学の簡潔な紹介と留学概要を事前に600字程度の英語にまとめ、これを暗誦できるまで頭に叩き込み、5分以内に伝えられるよう直前まで何度も読み上げの練習を行なった。当日は体育館のようなところで1,000名ほどの学生が待ち受けており、同じく参加していた他大学の現地職員が皆タイ語で発表する中、果たして学生たちに伝わるのかどうか不安であったが、紹介をはじめると皆が事前配布のパンフレットから次々と顔を上げ、私のほうをみて真剣に耳を傾けてくれていることがとてもよく伝わり、高揚感に似た嬉しさがぐっとこみ上げてきたことをよく覚えている。

また、学部（Kyoto iUP および工学部地球工学科国際コース）入学試験の運営補助も行った。特に、吉田カレッジオフィスが運営を担うKyoto iUPの入学試験の運営補助をASEAN拠点として行うことは初めての試みで、拠点で行われるタイ国内からの入学希望者に対する口頭試問に加え、東南アジアで行われるタイ国外からの入学希望者に対する口頭試問の現地での運営補助を、吉田カレッジオフィスの教員・職員と協力して行なった。

今回私が運営補助を行なった口頭試問に訪れた受験生たちはいずれも各国を代表するトップ校の出身者ばかりで、また実際、口頭試験を担当した教員の感想を伺う限りでも、極めてレベルが高いことが伺えた。本学を志願してくれたことは一職員として非常に嬉しい限りだが、同時に、こうした学生たちは米国をはじめとする海外のトップ大学も併願しているため、その中で本学を選択してもらい、また、今後も同レベルの学生たちに

	<p>志願してもらうために一職員として自分は何をすべきで、今後何ができるのだろうかと考え、知識・経験不足からくる自らの未熟さと、これから学ぶべきことの多さに身の引き締まる思いがした。</p>
<p>本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック</p>	<p>まず、研修成果について言えることは、日本にいただけでは味わえないであろう数々の得難い経験をし、その中で自らの未熟さを痛感し、更なる学びの必要性を強く認識出来たことが、私にとって何よりの研修成果だということである。</p> <p>例えば、NGO 法人化手続きの中で現地と日本の商慣習等の違いとその擦り合わせに苦悩すること、拠点における総務・経理業務全般を一人で行うこと、拠点所長・URA に随行し研究者交流の実態に触れること、本学への留学を志望するタイ王国をはじめとする東南アジアの優秀な学生達と直に接すること、これらは全て、日本で通常のキャリアを歩む限りは経験し得ないことだろう。</p> <p>しかし同時に、その中でありとあらゆる過程において、自らの知識のなさ、経験のなさ、教養の浅さを否応なく突きつけられ、自己嫌悪に陥ることも多々あったことも事実である。例えば、現地の商慣習との違いを意識し注意を払うためには、まず本学の会計規程等のルールに精通し習熟しておくことが必要であるし、式典や往訪に随行して研究者交流や共同研究の話しについてゆくためには、最低限本学と協定等を締結している大学のことは頭に入れた上で、各研究者の研究分野にかかる基礎的な知識を有していないと到底話しにはついていけない。また、本学に興味を持ってきている学生の質問や期待にこたえるためには、まず自分が本学の留学生受け入れの現状や体制についての概要を把握するとともに、本学の魅力を体感し自らの言葉で伝えることができるようにしておく必要があった。</p> <p>振り返れば、自分なりに考え調べた上で上手くいったと思うことよりも、考えても調べても、見様見真似で学ぼうとしても、知らない、分からない、上手くいかないの連続で、歯がゆいどころか唇を噛みしめてしまうことのほうが遥かに多い8ヶ月間だったと思う。</p> <p>そんな辛いときに触れる人の優しさほど、身に染みるものもないだろう。分からないこと、出来ないことを嘆いていた私を、拠点所長、URAの方々、現地職員、国際戦略本部の方々は常に温かい言葉で励まし、支えてくれた。そうした中で、自分ひとりでは何にもできないのだという無力さを思い知らされたが、本学が育ててきた「自重自敬」の精神を思い出し、そこでただ卑下したり、自らを責めたりするのではなく、未熟さは未熟さとして真摯に受け止めた上で、与えられた優しさに対して誠意と感謝と行動で応えようと自らを奮い立たせることが、様々な難題が突き付けられる</p>

本研修に取り組むにあたって、モチベーションの向上に大いに繋がっていたように思う。

モチベーションの向上と言えば、本研修を通じてめぐりあった数々の人との縁の中で、一職員として奮起させられるような経験も数多くさせていただいたことも決して忘れられない。

特に、研究者同士の交流に混ぜてもらった時に伺った、昨今の大学をめぐる環境の変化への不安や不満、留学希望者と接した時に耳にした、世界の情勢や政治の影響により、希望する国・大学への留学が叶わないという残酷で理不尽な現実に対する諦念と憤りの声は、職員としての今後のキャリアを思い描く上でも常に立ち返るべき原点となるような、極めて大きな影響をおよぼしたことは特に強調しておきたい。

普段あまり接することのない教員と他愛のない話しをする中でも、それぞれの教員の考える本学の抱える課題や解決策についてのご自身の見解、熱い想いを伺うことは大変に新鮮かつ刺激のあることで、興味深いものだった。ともすると職員の仕事は、職員同士のみのコミュニケーションに終始し、教員とはメール等文書上のやりとりのみになってしまいがちだが、大学というのは、教員と職員の協働で運営されるものなのだから、両者が対等に顔の見える関係を構築し、誠実にお互いの声に耳を傾けることの大切さを実感した。また、留学フェアや入試の場で、将来各国のリーダーとして未来を担ってゆくことが期待されているような優秀な学生達と直接接することも、職員として大変励みになることだった。私は今後のいかなるキャリアにおいても、彼・彼女らの言葉から溢れる学びへの意欲、そして逆境を跳ね除けるような希望にあふれる表情を折に触れて思い出すのだと確信しているし、そうした彼・彼女らの希望や期待に沿えるよう、職員として出来る限りの努力と支援をしてゆきたいと切に思う。

このように、8ヶ月間の研修期間は文字通りの研修、つまり私にとっての学びのための期間であり、今までの経験や能力を発揮するというよりは、試行錯誤を繰り返しながら、今後自分が何をしたいのか、自分が本学のために、教員や学生のために、そして社会のために何が出来るのか、そのために何が必要なのかということを常に問い続けるという、苦しくも私には必要であった、貴重な時間であったと思う。

さて、上に述べたような冴えない成果からではあるが、研修成果の還元先となる「国際化」という、本学を含む日本各地のありとあらゆるところでその必要性が叫ばれながらも、その内実は極めて曖昧模糊たるこの言葉について、まずはその意味するところから、考えてみたい。

伝統というものが、それが失われそうになる危機に瀕してはじめてそれ

として認識され、声高にその保護を叫ぶ際に用いられる言葉ならば、一般にいう国際化とは、この伝統という概念と本質を一にするものなのではないかと思う。そうであるならば、国際化とは、これを意味する言葉は時とともに変わることはあっても、その本質は決して現代特有の概念などではなく、むしろ私たちの歴史と同じくらい古いものではないかと思うのである。言い換えれば、今まで自明であったことが自明でなくなり、困難に直面した時に、それまでに培った知識や技能、経験を駆使してその人がいかに考え、行動し、平和的な解決を目指すのか、というこの動きこそが私思う国際化であり、これを当てはめるなら、これはいままで人びとが生み出してきた無数の意思決定が織り成す歴史と同義ではないか、という意味である。

そして、これが本学のいう国際化という言葉の趣旨にも合致するのであれば、本学の国際化の意図するところは、とりもなおさず本学の教職員と学生一人ひとりが自らの常識を常に疑い、大きな壁にぶつかりながら失敗を含めた様々な経験をし、そこから学び、自ら考え、生み出した知恵や技術を世のため人のために想って還元・承継する、そうした営みを繰り返し、繰り返ししてゆくことではないか。そうした一人ひとりの小さな波がまた別の小さな波を呼び、やがて大きなダイナミズムとなり、いずれ国境・言葉・種族を越えて広く響きあい、総体としてよりよい世界を目指す――。本学の意味する国際化とは、本学の重要な目標として挙げている「地球社会の調和ある共存」そのものを目指した動きのことであり、それは、ますます複雑高度化しつつある現代社会とその中で生きる人々に対して特に向けられた、より平和な未来に向けての切実な願いと祈りを込めて名付けられた言葉ではないか。

私は現在、iPS細胞研究所の総務掛に勤務しているが、日本に戻ってきて早々、自分の中のある変化に驚いた。研修前、私はあらゆる物事に計画的に取り組むことが好きで、逆に計画外のことが起きると必要以上に不安になったり、慌てたりすることが多く、それが自らの弱みだと感じていた。しかし、常に波瀾万丈な出来事の連続であった本研修を通じて知らぬ間に慣らされてしまったのか、研修後にはむしろそうした想定外のことを歓迎し、楽しむようになっていたのである。例えば、国外からの当研究所への視察において、視察団側から当日視察中に想定外の要望を受けたりしても、慌てることなく自然と冷静に対応できるようになっていたことには驚いた。これもひとえに、研修中、シンポジウムの開催一週間前になっても講演者を含めたプログラムの概要すらまとまらないが最終的にはみんなで何とかするという東南アジアらしい洗礼を度重なり受けてきたおかげ

かもしれない。

そしてふと、当たり前ではなかったことが当たり前のように出来ることに気づいた時に、不器用なりに、自らも国際化というものを体験し、国際化に順応しつつあるのではないかと感じたのである。なぜなら、国際化とは、決して「静」ではなく、絶え間ない「動」の概念そのものだから。自らの身に次々に降りかかる価値観、知識、経験への強烈な揺さぶり、その瞬間こそが、伝統が伝統として意識されるのと同じように、国際化という概念を強く認識させられる瞬間なのであり、そうした揺さぶりから逃げるのではなく向かいあい、周囲との調和を重んじつつ克服をする一人ひとりの努力と姿勢こそが、本学の国際化に何より必要なことだというのが私の立場である。

当然のことだが、組織全体の国際化とは、決して英語が堪能な一部のひとや、一部の意欲的なグループのみで成し遂げられるものではない。それは、何よりも構成員一人ひとりの自覚と行動の積み重ね、そしてそれらの調和によるものだからである。国境を越えて世界が瞬時につながるものが可能なグローバル化した世界に生きるということは、取りも直さず価値観を揺さぶられる国際化の波と壁に誰しもがぶつかり得るということであり、こうした困難を乗り越えるにおいて、英語の運用能力を有することは必要ではあっても、十分ではないことは自明だろう。何気ない言動が瞬時に世界に広まり、時に強い批判や非難を受ける現代においては、自らの知識、教養、能力、言動、倫理といったものすべてが地球規模で試され、同時に自らのそうしたすべてが地球全体に影響を与えようという責任感を忘れずいるということこそが、極めて難しいことだが、遥かに大切なことなのではないかと思うのである。

だから、私は今後も、本研修で学んだように、どのような環境に置かれようとも、自らの身に降りかかる様々な揺さぶりに対して、苦しみながらも周囲の人たちと協力して楽しみながら克服し、そこから直向きに学び続ける姿勢を貫ける自分でありたいと思う。

そうした自らの更なる国際化に向けて、私はまず、様々な背景を有する人達のその背景を円滑に理解することを目標として、学校の日本史や世界史で学ぶレベルの歴史、文化、宗教、経済、外交等の基本事項を、今一度教科書に立ち帰り、学び直そうと考えているところである。一見遠回り、役に立たないとさえ思えるこうした知識こそ、あらゆる方面からの揺さぶりに適応するために、そして、世界を広く視野に入れて行動するための基礎体力として必要不可欠であることを痛感したところだからである。

最後になるが、本研修への参加を通じて改めて強く感じたことは、京都

大学という大学が、自ら学ぼうとする意欲ある者には常に寛容で、こちらが望めば貴重な機会を惜しみなく提供してくれるということである。応募当時には新卒入職三年目のひよっこ職員で、しかも経理課という畑違いの部署にいた私が、興味関心の赴くままに「今は時期尚早かもしれませんが、興味はあります、ゆくゆくは参加してみたいとは考えています」と遠慮がちに言った時、「善は急げ、いますぐ行って、学んできてごらんなさい」と快く推薦して下さった上司のことを思い出すだけでも、本学が創立以来大切にしてきた「自由の学風」という、学ぼうとする者の自主性を尊重する文化は、職員にもしっかりと受け継がれていることに気づかされる。

本学が誇るべき、そして私が好きなこうした伝統が、危機に瀕した時のみに認識されるのではなく、常に世界に広く認知され、愛され、これを守ろうと思う志ある人たちによって守られ続けるよう、その中の一人として、また、この伝統の恩恵に深く与った者として、能うる限りの努力と恩返しをしてゆけたらと思う。